

フォークダンスと若者たち

練馬区の都立光が丘公園の一角に、通称「青春の丘」と呼ばれている、緑の芝生に覆われ赤松の木が点在する台地がある。天気の良い日は格好の憩いの場であるこの「丘」に、ある時多くの若者が集まった。「この丘の上で出会った男女は必ず結ばれる」と言う伝聞でも広まったのだろうか。実は先般、ユネスコの「ダンスの日」にちなんで「国際ダンスデー・フェスティバル」と銘打った集いが開かれたのだ。これは若い人たちのためにフォークダンスを中心としたお祭り空間をつくり、出会いと交流の機会を提供して、惹いては少子化対策に繋げようというもので、この運動の発起人である私の目から見たその時の印象を少しく文に綴ってみたい。

やや道中不便なこの場所に、都内はもとより一日がかりで神奈川、千葉、埼玉といった遠方からも20代前半と思しき女の子が一人でやって来るのには驚かされる。ほとんどフォークダンス知らない世代である彼・彼女等は何を期待し、どんな動機で足を運んでくれたのであろうか。

振り返って世の中を見るに、経済の発展は需要と供給のダイナミクスであると言えば聞こえは良いが、現代人は需要喚起のコマーシャリズムにより、「自己愛」なるものをおよそ極限にまで刺激され、拡張されている。それも克己心やプライドと言った側面ではなく、この場合、物欲・金銭欲などの所有欲、食欲・性欲、競争心・射幸心・見栄などである。それらがこれ見よがしに行われている事はテレビの大食い番組を一つ例に出せば十分である。

つまるところ自分だけが可愛いのであり、他人はどうでもよく、金銭的価値でしか評価されない成功体験を飽くなき追求する。青春とはそれだけのものか？ 彼らの多くが若くして既に疲れ、少なからず自己の内に閉じこもり、競争社会の中で漠然とした疑問を感じていないだろうか。そしてたとえ日々の生活が満たされていても、現代生活の中で何か足りない事を彼らなりに悟っている。その「何か」を求めて、フォークダンスに期待を託し、若者達はこの日この丘につどってくれたのであろう。

掬い取った砂が手の指の間から落ちてゆくように、先ほど述べた「自己愛型行動パターン」の拡大とともに徐々に世の中から失われて行ったものがある。人と人との見えざる「関係」、その絆である。愛・友情、思いやり・慈しみ、共感、融和・連帯感情、美德と言ったものがそれである。それらは親子、家族・家庭、学校、コミュニティ、更には世間なるものを維持する社会紐帯の要である。

私は人の情愛に依拠するもう一つの行動パターンとして、相互的共感行為を意味する「分かち合い」という言葉を使っているが、フォークダンスも本来その範疇に属しているものにとらえている。知らない者同士が躊躇無く手を取り合うだけでも、現代の感覚からすれば驚くべきものとも言えるのであるが、そのような素朴な触れ合いのエレメントがこの踊りには含まれている。そして男女の心が通い合う一瞬の喜びは踊ってみた者だけが分かる小

さな幸せである。

この分かち合いはフォークダンスでは全て「ながら」と言う現在進行形で行われる。踊りながら、歌いながら、語らいながら、目と目を見交わしながら、気持ちを一つにしなが、そして結果を求めず、終わりも無く...

五月晴れのその日一日、暮れなずむ夕映えが斜陽となって丘の木立に深い影を落とすまで、若者たちの歓声は緑の微風と合いまって、途絶える事なく辺りに木魂したのであった。

(平成20年5月記)

フォルクローレ連絡協議会事務局長 松原和雄

